



18 元八王子町1丁目「出口」付近

納した鰐口にも「由井領横川八幡宮」と記されている(編年102)。横河に八王子城下の三宿がつくられたため、宿の置かれた地区が横河から分けられ、八王子城落城後、宿が移転したのちに「元八王子」と呼ばれるようになったと考えられる。このように城下の三宿が開かれる以前から、裏宿は宿的な景観を維持し、横河郷の一つの中心だった可能性があらう。こうした状況を前提に、氏照は城下町を計画していった。氏照による宿の開設が、城山川と南大沢川によって南北を区画された狭い带状の台地の上に、新道の開削を伴って整備された可能性を指摘しておきたい。

三宿の 防御施設

三宿の出入口は、元八王子町二丁目の「出口」である(写真18)。こは元八王子町と式分方町を隔てる元八王子丘陵の突端に位置し、先端部には七面大明神が祀られている。そして、その西方には、砦状の防御施設

が確認できる。丘陵先端に近い最高所を削平して曲輪を設け、曲輪の周囲は掻き下ろしによって急峻な斜面をつくりだしている。また曲輪のある丘陵の北麓には湧水がみられ、そこに向かう通路も確認できる。守備兵の水場として利用されていたことだろう。また、この砦状遺構の北側、式分方町の小字を「城の腰」または「城下」といい、前述のとおり、南大沢川が合流した大沢川は「城の腰川」とも呼ばれている。「城の腰」は、城山の裾を示す地名として一般的にみられるものであるから、ここには城下三宿への出入口を監視するための八王子城の山城が存在していたとみてよいだろう。城山川と元八王子丘陵はこの付近で最も接近し、その幅は七〇メートルに過ぎない。八王子城からの街道は、この八幡宿東端の丘陵と川によって狭められた空間を鉤の手状に屈曲して四谷方向に向かっていた。鉤の手状の屈曲は、宿の出入口に

よくみられる「杵形」と呼ばれる防御のための工夫であり、ここが八王子城下の「出口」であることを示している。木戸を設けていた可能性も十分考えられる。ここを八王子城下の東端と考えたい。八王子城攻めについて『名勝図会』は軍記を引用し、攻め寄せた軍勢は「丑の刻横山に至り黎明に八王子町構への城戸を破って城下に乱入したが、「城迄は遙かに遠」かつたと記している。この「城戸」が、八王子城根小屋地区「内宿」の木戸であったとしたら、城まで「遙か」というほどではない。したがって、この城戸は城下町の東端に設けられた出口の木戸と考えられる。また、三宿のほぼ中央に位置する石神坂は、現状では緩やかに傾斜する坂道であるが、聞き取りによれば、かつては上下二段に分かれた段丘上の地形で、街道は段差を巻くようにして越えていたという。戦前に撮影された航空写真にも、こ

で街道がクランク状に屈曲している様子が確認できる(写真19)。八王子城防御のため、あえて段差を残していたとすれば、ここにも木戸が設けられていたことであらう。

三宿については、城の存続期間が短かったため、八日市宿・横山宿・八幡宿がどの程度まで整備されていたのかは不明である。滝山城下から町屋や寺院を移転させたであらうから、ある程度の城下町の形成は進んでいたと思われるが、その実態は史料がなく確認できない。滝山城下の三宿が約一・三キロの範囲だったのに対して、八王子城下の宿は約二キロに及び、城下の規模も氏照の権力と勢力の拡大に比例して大き



19 昭和16年(1941)頃の元八王子町2丁目付近 石神坂でクランク状に曲がる道

くなつたとも考えられる。城の移転理由の一つに、滝山城下は狭く城下町の発展に限界がみえていたこともあるのかも
しれない。

内宿の景観

外宿はその範囲も広く、また現在では都市化も進んでおり、かつての城下町の景観をうかがわせるもの
は少ない。一方、内宿である根小屋地区は、国史跡八王子城跡とともに、地元「元八王子町三丁目町会」
の協力によって、比較的往時の景観をたどりやすい環境が維持されてきた。中でも宗関寺より内側は短冊状の地割りと
ともに城下の都市的景観をうかがわせ、「カゲヤシキ」や「ニシガワ」などの呼称が伝えられている。「カゲヤシキ」は、
氏照の重臣中山家範（いなの）の官途名（かえと）「勘解由（かげゆ）」に由来しているとされ、ここに中山氏の屋敷があったと伝わっている。「ニシ
ガワ」も氏照の侍医西川信濃の屋敷跡とされている。発掘調査の結果、鍛冶職人の存在を示す遺物、塀や掘立柱建物跡
が何棟か確認され、農村とは異なる景観をみせていたようである。しかしながら発掘調査の範囲が限られているため、
どの程度の人数が居住していたか、建物の密集度がどの程度だったかなどは確認できない。最近の研究によって、八王
子落城後、九月二十一日以降も上杉景勝の部隊が八王子在番衆として駐屯していることが明らかにされたことから（編
年145）、確認された堀立柱建物跡の中には上杉軍によって使用されていたものがあるかもしれない。

氏照当時の城下町の景観をうかがわせる史料は、数少ない。天正十五年（一五八七）十二月二十四日、氏照は戸倉あき
る野市（ののいち）在住の家臣来住野大炊助・同甚七郎・萩原五兵衛に宛てて、小田原城への参集を命令する「陣触（じんぶち）」を出した（編
年105）。氏照はこの陣触で来住野らに、遅参しないよう前もって「八王子二在宿」せよと指示している。このことから
当時八王子城下に家臣団の宿泊を可能にする設備が整っていたことがわかる。また、翌十六年正月三日、氏照は家臣久
下兵庫助に、小山衆とともに小田原に向け出發するよう命じ、あわせて「郷中（ごうちゆう）にく（ま）あ物たるほどの物、置くべからず」
とした（編年107）。これは進軍してきた敵が領内から食料を徴発して、自軍の兵糧とすることを防ぐ処置である。従来北

条氏が戦って来た関東の諸大名はこうした敵地での食料調達や乱捕りがあったりまえた。氏照は豊臣軍もこうした行
為をすると見込んでいたのである。しかし、圧倒的な財力で流通を掌握し、大量の兵糧を関東へ運び込んできた秀吉軍
にはあまり効果がなかったであろう。それはともかく、氏照は穀物を詰めた俵を八王子城へ運び込めと命じ、郷中に置
いたままでは「御法」違反であり、処罰するとしている。そして、八王子に屋敷をもたない者は、寄親（よりのや）か知人に依頼し、
その屋敷の隅にでも置かせてもらえと命じている。このことから八王子城下には、少なくとも寄親クラスの武士や上級
武士の屋敷があったことがわかる。この処置はかなり徹底したとみられ、八王子城には多くの俵が運び込まれたよう
である。このことは八王子城落城後の七月二十八日、豊臣秀吉が八王子在番の太田一吉に「八王子之俵子」を自分の御座
所に運ぶよう命じていることからわかる（編年140）。この御座所は岩付（さいたま市）から小田原に向かう際に使用するた
め秀吉が新たにつくらせたもので、河越城を破却した材料を持ち込んで普請するよう指示している。近年府中市のJR
府中本町駅に隣接した御殿地区で、古代の国司館跡の上に徳川家康によって造営された御殿跡とみられる遺構が、葵
紋の瓦片を伴って発見された。この徳川氏の御殿が、天正十八年七月に奥州会津（福島県会津若松市）から帰国する秀吉の
ための御座所に起源をもっていると考えられる。八王子城から俵が運ばれたのはこの場所であった可能性があろう。
八王子城は、城として機能していた期間が短いため、城下町の整備はまだ過渡期であったにちがいない。そのため八
王子城下の景観は、その地割りと部分的に残る防衛のための削平地や土塁状遺構によって、かろうじて当時の姿をうか
がえるに過ぎない。しかしながら戦国末期に城と城下町を計画的に整備し、その完成を目前にしながらも、豊臣政権と
の戦いの中で中断した八王子の城下が、近世初頭に東へ約五（き）の浅川沿いの平地へと移され、甲州道中の八王子横山十
五宿として発展、今日の八王子市の中核を形成していったことはまぎれもない事実である。